家忠日記増補　二十二

内閣文庫				
和 書 類	三二四七八號	二五冊	一文三函	三架

（二二ノ）

内閣文庫		
番號	和	32478
冊數	25（	22）
函號	163	60

共廿五

国立公文書館
National Archives of Japan

家忠日記追加巻之二十二

自慶長十九年正月至同年十月

慶長十九年甲寅

慶長十九年元和元年攝州大坂ノ両陣其ノ大綱ヲ挙テ故有テ詳ニ記ナス

正月大

一日　台徳院殿　大神君ニ謁シ新正ヲ賀シ給フ

二日　秀頼薄田隼人正ヲ使トメ江戸ニ来賀ス

五日　台徳院殿　大神君ヲ本城ニ饗シ

内閣文庫

給テ猿楽アリ
七日大神君葛西ニ狩シ給フ
八日大神君千葉ニ着御
九日大神君東金ニ着御
十六日大神君千葉ニ還リ給フ
十七日大神君又葛西ニ還リ給フ
卅日大久保相模守忠隣 鈞命ヲ奉テ洛
ニ赴キ吉利支丹ノ法ヲ禁ズ

十八日大神君江戸ニ還御
卅日最上出羽守義光卒ス 六十九歳
廿日大久保忠隣ガ罪ヲ定ラル
廿一日安藤對馬守重信本多出雲守忠
朝淺野采女正長重松平越中守定綱高力
左近太夫忠房等ニ 命メ大久保忠隣ガ
小田原ノ城ヲ請取ラシメ給フ
卅日大神君江戸ヲ出給テ神奈川ニ着御

廿二日　大神君藤澤ニ著御
廿三日　大神君中原ニ著御
廿四日　大神君小田原ニ著御
廿五日　台徳院殿小田原ニ渡御有テ
大神君ニ謁シ給フ
廿七日　大神君小田原ヲ出給テ三島ニ著御
此日　台徳院殿江戸ノ城ニ還リ入給フ
廿八日　大神君善徳寺ニ著御

廿九日　大神君駿府ノ城ニ還御
此月松平伊豆守信吉ガ嫡子忠國從五位
下ニ叙シ山城守ニ任ズ
　二月小
二日　大久保相模守忠隣江州ニ謫セラル
井伊右近大夫直俊ガ領内ニ蟄居ス忠隣
ガ二男右京亮教隆三男主膳正幸信武州
川越ニ謫セラル忠隣ガ嫡孫仙（後加賀守忠任ト号ス）

七文忠常ガ遺跡二万石ヲ領ストイヘド
祖父忠隣ガ事ニ依テ蟄居ス寛永二年忠
任免許元和
三年教隆津軽幸信南部エ各遷
サル寛永五年二人トモニ免許
三日浅野但馬守長晟去年兄ノ幸長ガ
遺跡紀伊国ヲ賜ル謝礼トメ駿府ニ至テ
大神君ニ謁ス
十四日　江府老臣執事奉行等ニ　鈞命
アリテ連署ノ起請文ヲ書シメ給フ

起請文前書

一 奉對　公方様御後闇儀毛頭存間敷事
一 雖為親子兄弟　公方様不被仰付ため惡事務肯
ち徒黨を結ひ誓約いたし候ても有ましき事
一 今度大久保相模守蒙仰切支丹穿鑿之儀ニ付
相模守父子ニ不通之仕事
一 公事批判沙汰之儀知音好ニ依ス
雖為親子兄弟依怙贔屓有間敷事

付事

一御評定所批判相談之時ニ手心底ニ相違有之
非道不要之悪儀毛頭不可申事

一御前之儀ニ付候族悪心世上ニ沙汰
者不及申他言余人ニ付何ニ不依
して當人能不出者他言仕間敷事

一知音立を仕寄合一味仕もの情有之言上可仕事

一背上意候者知音好身たりといふとも

入魂仕間敷事

一此衆中或ハ背御法度或ハ贔屓偏頗
いたし非法之事悪事有之ハ其身ニ立
候もの穿鑿之上ニ而被仰付候ニ付可申付事

右條々若於相背者

慶長十九年
二月十四日

滝川兵四郎
箕浦勘兵衛

井上主計頭
水野監物
安藤対馬守
土井大炊頭
酒井備後守
酒井雅楽頭

十八日

寺領ノ印ヲ浅草寺ニ賜ル

一 当寺領五百石此内二百石寺内修理料共三百石別当分事

一 衆徒之跡濫凡僧不可居住同寺院明屋撰其人相抱事
付法式法度以下随寺務下知無異儀
役所造立之儀者令怠慢者忽一段改易寺領事

一 山林竹木門前屋鋪等如先規諸役令免除事

右任慶長十八年三月十三日先判之旨永不可相違者也

慶長十九年
二月十八日
武蔵国豊島郡
浅草寺

十九日松平和泉守家乗卒ス四十歳喪過
テ後嫡子源次郎乗寿後和泉守ト号ス亡父家乗
ガ家督ヲ賜ル謝礼トメ城ニ登テ
台徳院殿ニ謁ス于時御馬月毛單物暑衣ヲ
乗寿ニ賜ル乗寿ガ家臣四人ヲ御前ニ召
テ各單物暑衣胴服ヲ賜ル

廿二日米津清右衛門尉ヲ阿波国ニ於
テ殺サル去歳此地ニ謫セラル

三月大

七日高山右近堅ク吉利支丹ノ邪法ヲ
守ル是ニ依テ西洋ノ国ニ放サル
卅日五岳ノ僧ニ　命メ文及ヒ頌ヲ作ラ
シメ給フ
九日台徳院殿右大臣ニ任ジ給ヒ同日

従二位ニ叙シ給フ

十三日　法式五箇條ヲ西樂院ニ賜ル

定

一学問勤行不可有怠慢事

一大山寺領之田畠并山林境内等可為西樂院次第事

一知行多少住坊可依其人事

一縦雖為先規於悪儀者随時宜可改之事

一設一列公事沙汰不可申出事

右可守此旨者也仍如件

慶長十九年
三月十三日

西楽院

一六月

四辻宰相季継　大神君御営中ニ於テ管絃アリ箏ヲ弾ジ樂人笙篳篥ヲ吹

千秋樂　青海波　陵王

四月大

三日　朝日ノ色銅ノ如シ
五日　駿州海濱ニ異魚ヲ得タリ其形亀
ニ似ル最大ニメ頭犬ノ如シ背黒ク亀甲
ノ如シ尾三股ニメ大鰭アリ重キ事二十
餘人ヲメ是ヲ持ツ
六日　霰降ル冬天ノ如シ
廿一日　大神君　勅使ヲ御営中ニ饗シ
給テ猿樂アリ　勅使　台徳院殿右大臣
ニ任ジ給フ綸旨ヲ以テ江戸ニ至リ駿
府ニ帰リ来ル故ニ是ヲ饗シ給フ
諸州ノ牧伯ニ　命メ江戸及ビ高田ノ二
城ヲ築カシメ給フ
廿六日　小笠原左衛門佐信之卒ス　四十五歳

五月小

五日　台徳院殿ノ御使酒井雅樂頭忠世

駿府ニ到ル
八月酒井忠世 大神君ニ謁シ右大臣
ノ任官ヲ謝ス 台德院殿 大神君ニ白
銀三千兩ヲ献シ給フ 大神君ヨリ刀長光
ヲ忠世ニ賜ル
廿日 前田利長 権中納言従三位本右利勝 逝ス
此月池田越前守重利駿府ニ参候シ始テ
大神君ニ謁ス 重利其先キ本願寺ニ在テ下間按察使ト号ス 池
田ハ母ノ姓タルニ依テ下間ヲ改テ池田
越前守ト号ス
六月大
六月 妙法院ノ宮青蓮院 大神君ノ御
營中ニ来テ山徒ト台教ノ義ヲ論ズ
七日 妙門青門ヲ駿府ノ城ニ饗シ猿樂
ヲ見セシメ給フ
廿一日 山口但馬守直友 鈞命ヲ奉テ

吉利支丹ノ法ヲ制センガ為メ伏見ヲ出
テ肥前国長崎ニ赴ク

七月小

廿一日　飛鳥井中納言雅庸　大神君ノ
御前ニ於テ源氏物語ヲ講ス
此日洛陽大佛修造成テ供養ヲ行ンガ
為メ秀頼ノ家人等其警固トメ入洛ス導
師ハ三寶院妙法院ノ両門主也顕密ノ僧
徒等群参ス秀頼モ駕ヲ東山ニ発セント
催ス于時板倉伊賀守勝重片桐東市正且
元ニ謂テ云リ今度請韓長老ガ書所ノ大
佛鐘ノ銘前征夷将軍従一位右僕射源朝
臣家康公且ツ國家安康ノ文　大神君ノ
貴慮ニ應セズ是ヲ怒リ給フ今日供養ノ
事延引有ルベキノ旨ヲ告ル是ニ依テ此
月供養ヲ止ラル

洛陽大佛鐘銘

以下元図ニ有リ

欽惟豊國神君昔年掌普天之下位億兆之上外施仁政内帰佛乗是故天正十六戊子夏之孟相攸於平安城東創建大梵刹安立盧舎那大像矣蓋丈慕聖武帝南京之大像睎顔頼朝公東大之再建者也雖然慶長七年臘月初四不圖羅鬱攸之變已為烏有矣凡戴髪含歯之類無不歎惜焉粤

前征夷大将軍従一位右僕射源朝臣家康公謂正二位右丞相豊臣朝臣秀頼公曰舎那梵刹者豊國之創建也不幸而有變也不能無遺憾焉右丞相何不継先志乎右丞相曰盛哉此言憑玆王發弘願輙命斥桐東市正豊臣且元再建舎那寶殿始于慶長己酉玉成于慶長癸丑矣速畢其功者以大樹鈞命無監 右丞相志願不浅也童子

洛陽大佛鐘銘

欽惟 豊國神君昔年掌普天之下位億兆之上外施仁政内帰佛乘是故天正十六戊子夏之孟相攸於平安城東創建大梵刹安立盧舍那大像矣蓋亦慕聖武帝南京之大像睇顔頼朝公東大之再建者也雖然慶長七年臘月初四不圖罹欝攸之變已為烏有矣凡戴髪含齒之類無不歎惜焉粤

前征夷大将軍従一位右僕射源朝臣家康公謂 正二位右丞相豊臣朝臣秀頼公曰舍那梵刹者 豊國之創建也不幸而有變也不能無遺憾焉右丞相何不継 先志乎右丞相曰盛哉此言憑茲丕發弘願輙命片桐東市正豊臣且元再建舍那寶殿始于慶長己酉玉成于慶長癸丑矣速畢其功者以大樹鈞命無監 右丞相志願不浅也童子

聚沙之戯猶功用不可測矧又過長者布金
之制乎其佛身也萬徳圓滿之受用身花嚴
岁上之教主也臺上盧舎那葉上大釋迦花
中小釈迦一花百億国一國一釈迦三重相
開互為主伴音聲無邊色像無邊之相好不
移寸歩可立而見矣寔變忍界成報土者乎
其寶殿也公輸削墨郢工運斧嵯峨棟宇高
秀青雲之上璀璨玉砌深徹黄泉之底千楹

萬柱崢嶸其内大梁小椽絡繹其上繡櫝焜
燿雕棋玲瓏階墀疊石鈴鐸鳴風壁門前聳
玉廊四回訝都史夜摩忽現下界怪蓬島瀛
洲已在人間天鬼神所共瞻礼寔天下之
壯観也緬懐菴没那爛陀大刹甲于西域嘉
別阿逸多大像冠于東震亦風猶在下矣加
旃欲鑄梵鐘以備晨昏金銀銅鉄鉛錫白鑞
積如丘山火官冶工差肩而雲集槖籥時奮

鎔範已設萬鈞洪鐘一時新成矣周礼所謂
千鼓釭舞角衡旋篆無一不備焉昔在佛世
梵王下鎔鑄祇桓金鐘拘留孫造石鐘諸佛
出興亦不多讓矣丈鐘者禅誦之起止齋粥
之早晩送迎緩急之節必鳴之以警衆焉顯
密禅法器之制莫先於鐘故建寺安衆必先
置之然又摧折魑魅屈伏魔外三寶為之證
明諸天為之擁護罽賓吒王剣輪頓空南唐

李主累械忽脫雲門七條德山下堂其妙用
不可勝計矣蒲牢一聲上徹天宮下震地府
雷鼓霆擊普及微塵刹土使人天幽明異類
耳根清淨以證入圓通三昧其施不亦博乎
金索簨簴以之掛着寶樓祝日御萁
天子萬歳　白齡千秋　銘曰
洛陽東麓　舍那道場　聳空瓊殿　横虹畫梁
参差萬尾　崔嵬長廊　玲瓏八面　焜燿十方

境象兜夜　利甲支桀　新鐘高掛　爾音千鍠
響應遠近　律中宮商　十八聲緩　百八聲忙
夜静晝誦　夕燈晨香　上界聞竺　遠寺知湖
東迎素月　西送斜陽　玉筍掘地　豊山降霜
告怪於漢　救苦於唐　霊異惟夥　功用無量
所庶幾者　国家安康　四海施化　萬歳傳芳
君臣豊楽　子孫殷昌　佛門柱礎　法社金湯
英檀之徳　山高水長

旹慶長十九甲寅歳孟夏十六日
大檀那正二位右大臣豊臣朝臣秀頼公
奉行片桐東市正豊臣且元
冶工名護屋越前少掾藤原三昌
前住東福後住南禅文英叟清韓書

一 九月 秀頼大佛ノ鐘ノ銘 大神君ノ
御旨ニ應ゼズ怒リ給フツ聞テ片桐東市

正且元ヲ駿府ニ赴カシメ是ヲ陳謝セシ
ト欲ス片桐駿府ニ至ルト云ヘドモ
大神君ノ御憤ヲ恐テ府中ニ入ル事ヲ得
ズ凡子ノ一院ニ居テ鈞命ヲ伺フ秀頼
ノ母堂淀ノ御方ト号ス是ヲ聞テ大蔵卿ノ局大野
修理ノ亮ガ母尼正永渡過内蔵助ガ母ヲ使トメ駿州ニ
赴カシム

八月大

(朱書：元和元、三、廿一ヘ合叙)

六月 金地院以心ニ命メ大蔵一覧ヲ
梓ニ鏤メ給フ

十三日 南蛮人来朝絲帛等ノ方物ヲ献ズ

卅日 台徳院殿ノ命ヲ奉テ安部四郎五
郎正之監使（俗ニ是ヲ目付ト云）トメ肥後國ニ赴ク

九月小

一日 阿蘭陀人来朝メ絲木綿及ビ龍脳
丁子等ヲ献ズ

正且元ヲ駿府ニ赴カシメ是ヲ陳謝セシ
ト欲ス片桐駿府ニ至ルト云ヘドモ
大神君ノ御憤ヲ恐テ府中ニ入ル事ヲ得
ズ几子ノ一院ニ居テ鈞命ヲ伺フ秀頼
ノ母堂淀ノ御方是ヲ聞テ大藏卿ノ局（大野修理ノ亮ガ母）尼正永（渡邊内藏助ガ母）ヲ使トメ駿府ニ
赴カシム

八月大

六月

金地院以心ニ命メ大藏一覧ヲ
梓ニ鏤シメ給フ

十三日　南蛮人来朝絲帛等ノ方物ヲ献ズ

廿日　台徳院殿ノ命ヲ奉テ安部四郎五
郎正之監使（俗ニ是ヲ目付ト云）トメ肥後國ニ赴ク

九月小

一日　阿蘭陀人来朝メ絲木綿及ビ龍脳
丁子等ヲ献ズ

五月

法式三箇條ヲ光明寺満行院ニ賜ル

法度

一 上野国群馬郡天台宗榛名山巌殿寺為天下安全御祈祷毎日之護摩毎月之祭祀不可有退転事

一 山中住居之者可守学頭別当下知事

付二王門之内不可有妻帯事

一 堂塔社頭坊舎造営之外竹木不可伐之他住山之者薪取事不可有異儀事

右堅可守此旨者也

慶長十九年九月五日

学頭 光明寺

別当 満行院

九月

片桐且元駿府ノ城ニ登テ

大神君ニ謁シ使ノ意趣ヲ達ス　大神君
命有テ曰秀頼ハ將軍家ノ聟又子ノ好ア
リ秀頼腹心ヲ呈セバ吾何ゾ是ヲ疎ニセンヤ秀
頼母堂ノ使二女モ城ニ登テ母堂ノ一翰
ヲ献ズ此　鈞命ヲ聞テ心ヲ安シ大ニ悦ブ
此日里見安房守忠義安房國ヲ除カル大
久保忠隣ガ縁者タルニ依テナリ
十一月　片桐及ビ二女暇ヲ告テ大坂ニ

帰ラント欲ス于時二女本多上野介正純
ヲシテ　大神君ノ御返翰ヲ請フ正純ガ
云ク汝等　大神君ニ謁見メ直ニ　御旨
ヲ聞ク何ゾ返翰ニ及バン二女強テ是ヲ
請フ正純止ム事ヲ得ズメ　大神君ニ達
ス　鈞命ニ曰先日二女ニ説ク趣ノ外返
札ナシ其旨ヲ母堂ニ告ベキノ由　命ゼ
ラル二女是ヲ聞テ片桐ト共ニ駿府ヲ出

国立公文書館
National Archives of Japan

テ大坂ニ赴ク于時　大神君片桐ヲ背リ
駿府ニ留メ給テ崇ノ傳長老本多正純ヲ
以テ片桐ニ命メ曰秀頼大坂ニ兵ヲ集メ
テ乱ヲ催スノ沙汰都鄙其聞ヱアリ速ニ
其事ヲ止ズンバ将軍家ト必ズ兵ヲ締バ
ン吾レ深ク是ヲ愁ル汝ガ思慮ヲ以テ和
親ヲ調ヱシムベキノ旨ヲ　命ゼラル片
桐ガ云ク是天下ノ大事ナリ下トメ上ヲ

計ル事其憚アリ願ハ　御旨ヲ奉テ秀頼
ニ傳ヱント再三固辞スルト云ヘドモ
大神君強テ是ヲ　命ゼラル、ニ依テ片
桐止ム事ヲ得ズ遂ニ愚意ヲ述テ云ク秀
頼母堂ヲ質トメ関東ニ下スカ秀頼大坂
ノ城ヲ避テ他邦ニ移ルカ秀頼躬ラ東国
ニ下テ和ヲ請フカ是三ノ外両公ノ御憤
ヲ止ル愚慮ナキノ旨ヲ言フ且元思慮ニ及バザルノ

間密ニ正純ニ問フ正純此三事ヲ以テ言
フベキノ旨ヲ訟リニ依テ且元遂ニ此旨
ヲ達ス 崇傳長老本多正純此旨ヲ 大神君
ニ達ス 大神君ノ曰片桐ガ言フ所可ナ
リ速ニ大坂ニ帰テ三事ヲ以テ秀頼ニ告
ケ交和成ラシムベキノ由ヲ 命ゼラル
片桐駿府ヲ發〆大坂ニ帰ル江州水口ノ
驛ニ〆二女ニ追付片桐 大神君ノ命ヲ
二女ニ語ル二女駿府ニ〆聞ク所ノ 御
旨秀頼ニ疎意ナキノ 命ニテ此ノ難儀ノ
三事ナシ依テ二女色ヲ變〆耳語云ク吾
駿府ニ〆 大神君ニ謁シ直ニ 鈞命ヲ
聞ク秀頼ニ懇意ノ 御旨有テ敢テ此三
事ナシ是ハ片桐ガ秀頼ヲ叛テ 大神君
ニ志ヲ通ジ其身ヲ立ントハ謀ル事疑ナシ
ト謂テ二女竊ニ水口ノ驛ヨリ脚力ヲ以テ
片桐ガ逆意アルノ旨ヲ大坂ニ告テ二女

翌朝駕ヲ發メ大坂ニ赴ク片桐ハ板倉伊賀守勝重ニ議スベキ事アルニ依テ洛ニ赴ク二女大坂ニ帰テ片桐ガ逆意ヲ告ル秀頼ノ母堂大ニ怒テ大野修理亮ヲ召テ謂テ云ク片桐難儀ノ三事ヲ以テ 大神君ニ約ス是片桐ガ 大神君ニ志ヲ通ジ秀頼ヲ誅ル此三事何レヲ以テ可ナリトセンヤ所詮 大神君ト兵ヲ締ビ吾レ秀頼ト共ニ城中ニ死セント忿怒浅カラズ大野ハ素ヨリ片桐ト不快タルニ依テ母堂ノ旨ニ従ヒ先ヅ片桐ヲ殺メ後兵ヲ大坂ニ揚ント諫ル

六一日

寺領ノ印ヲ宋山ニ賜ル

雲巖寺今度改号ス竜泉寺ト遠江國豊田郡赤佐之郷内三拾五石二斗二升紀之

歸不可附也并山林竹木寺中門前諸役令免許佛事勤行修造等不可有懈怠之状如件

慶長十九年
九月廿一日

宋山

廿三日

片桐大坂ニ帰リ城ニ登テ秀頼ニ謁シ大神君ノ台命ヲ告ル二女ナト云ノ所ノ三事ノ難儀聊モ違ハズ故ニ秀頼及ビ母堂弥怒テ片桐ヲ殺サント決ス母堂侍女ヲシテ片桐ニ謂テ云ク吾イマダ汝ニ見エズト云ヘドモ他人ヲシテ此密事ヲ議スベキニ非ズ面メ吾レ直ニ是ヲ聞カン天下ノ大事タルノ間吉日ヲ撰デ重テ城ニ登ルベキノ旨ヲ説シメ片桐ヲ大坂ノ城中ニ殺サント謀ル片桐此計略ヲ知

ラズ母堂ニ謁セント其吉日ヲ待ツ明日秀頼片桐ヲ城ニ召テ大野修理亮渡邊内蔵助木村長門守ヲシテ殺サシメント議ス織田常真入道ハ母堂ノ外戚タルニ依テ大坂ニ寓居ス秀頼片桐ヲ殺シテ後常真入道ヲシテ権ヲ執ラシメント欲ス常真是ヲ辞シテ云ク片桐ヲ殺サバ関東ノ聞エ宜シカラザルノ旨強テ諫言ヲ盡スト云ヘドモ秀頼モ母堂モ敢テ聴カズ常真天満ノ宅ニ帰テ石河伊豆守ヲ招テ此事ヲ議ス石河ハ片桐主膳正ト交好ノ友ナリ是ニ依テ石河速ニ此事ヲ主膳正ニ告テ其ノ夜石河剃髪シテ高野山ニ走ル石河逐電スルニ依テ大坂中ノ巻説静ナラズ

六五日 黎明常真入道竊ニ使ヲ遣シ片桐ガ家人小島庄兵衛尉ヲ常真ガ天満ノ

宅ニ招テ今日秀頼ノ母堂片桐ニ面メ
大神君ノ御返答ヲ聞ント謂テ城ニ登ラ
シメ片桐ヲ殺サント謀ルノ由ヲ告ゲ知
スル小島驚テ速ニ帰テ是ヲ片桐ニ告ル
常真此事ヲ片桐ニ密通メ後大坂ヲ出奔
メ洛ニ入ル
此日秀頼ノ母堂片桐ニ見エント城ニ召
ス片桐病ト称メ出デズ使毎三ニ及ト云

ヘ𪜈片桐遂ニ往ズ于時大野修理亮秀頼
ニ言テ云ク片桐隠謀露顕スル事ヲ察メ
病ト称メ城ニ登ラズ速ニ兵ヲ発メ是ヲ
撃シ秀頼是ヲ許ス片桐此催ヲ聞テ兵ヲ
宅城ニ集ル故ニ大坂中群動ス秀頼ノ臣
等使ヲ片桐ガ宅ニ遣シ謂テ云ク関東ノ
聞ヲ憚ルノ時節且元兵ヲ集ル事何ノ
所謂ゾヤ片桐聞テ吾聊モ逆意ナシ然ル

ニ謀テ城ニ召シ既ニ今日誅セラレント
ス素ヨリ吾是ノ重キ事死ヲ顧ズト云ヘ
ドモ罪無メ讒ニ死セン事吾レ是ヲ愁ル
且ツ病痾ニ依テ遅参ス快期ヲ待ント欲
スルノ処ニ兵ヲ發メ吾ヲ撃ント催サル
當座ノ難ヲ免レンガ為メ宅地ニ兵ヲ集
ル駿府ニメ大神君ノ台命ニ女ト吾ガ
聞ク言違フ秀頼及ビ母堂是ヲ疑ヒ給フ

是大神君ノ計略タルベキカ吾レニ於
テ全ク異心ナキノ旨ヲ云フ是ニ依テ大
坂ノ群動暫ク静ナリ
此月台徳院殿ノ命ヲ奉テ内藤石見守
歩行頭トナル

十月小

一日 板倉伊賀守勝重駿府ニ告テ云ク
秀頼片桐東市正且元ヲ誅メ乱ヲナサン

内閣文庫

ト欲ス大神君此事ヲ江戸ニ告ゲ給フ
是ニ依テ諸国ニ令ヲ下シ矢ヲ大坂ニ発
メ秀頼ヲ討ント催シ給フ
此ノ月片桐東市正同姓主膳正（東市正且元ガ弟）従
者ヲ卒メ大坂ヲ退キ茨木ノ古塁ニ入ル
大坂宅地ヲ出ルノ時大野修理亮ガ嫡子
信濃守ト東市正ガ長子出雲守ヲシメ互ニ
質ヲ取ラシメ大坂七組ノ輩是ヲ送ル御

厨ノ邊ニメ質ヲ返メ退キ去ル是ヨリ木
野修理亮弥権ヲ執ル
松平伊豆守信吉松平隠岐守定行井伊掃
部頭直孝渡邊山城守茂板倉勝重ト議メ
諜者ヲメ大坂ノ密計ヲ聞カシメ駿府及
ビ江戸ニ告ル
保科肥後守正光　命ヲ奉テ淀ノ城ヲ警
衛ス（正光後ニ佐竹義宣ガ後陣今福ノ砦ヲ守ル）

二月
松平攝津守忠政奥平信昌ガ三男卒ス三十五歳
台命ヲ奉テ保田甚兵衛尉則宗使番トナル
内藤外記正重輕兵頭トナル御持弓歩兵五十人
片桐大坂ヲ退クノ後秀頼商人運送ノ兵粮ヲメ城ニ入レシメ天満船場ノ材木ヲ以テ城壁ヲ修シ溝湟ヲ深クシ兵ヲ集テ專ラ防戦ノ謀ヲナス板倉勝重諸国ノ兵粮運送ヲ停止ス此節東國收納ノ兵粮大坂ニ着船ス秀頼番兵ヲメ是ヲ守ラシム是ニ依テ大坂ヲ出船スル事ヲ得ズ勝重是ヲ聞テ使ヲ大野修理亮ガ方ニ遣メ謂テ云ク秀頼兵ヲ揚ント催ス由其聞ヘアリ幸ニ此兵粮ヲメ軍用ノ資トナサシムベキノ旨ヲ云フ大坂城壁修築イマダ成ラズ兵ヲ集ル事不足ナルノ間暫ク関東ノ聞ヲ恐テ即日此兵粮ヲ船ニ積デ伏見

ニ送ル
村上三右衛門ノ尉大坂ノ物忽ヲ聞テ丹波
國ヨリ馳来テ茨木ノ城ニ加ハリ拒ント片
桐ニ議ス芝山小兵衛ノ尉ヲ泉堺ノ政所ト
メ関東ヨリ指置ル秀頼此所ノ警衛トメ
赤座内膳正植島玄番頭又子ヲメ泉堺ニ
赴カシム彼津ノ商人永井宗薫ハ関東
恩顧ノ者也是ニ依テ大坂ニ叛ク故ニ彼

ガ家ヲ没収メ宗薫ヲ大坂ニ擒ニス芝山
泉堺ヲ去テ阿州ニ走ル片桐茨木ノ城ニ
於テ此告ゲヲ聞テ芝山ヲ援ンガ為メ兵
ヲ分テ泉堺ニ發ス尼箇崎ニ至テ渡海ノ
船ヲ求ム彼津ハ建部三十郎政長（後内匠又丹波守ト改ル）
是ヲ守ルト云ヘドモ微勢タルニ依
テ松平武蔵守利隆大神君ノ命ヲ奉テ
池田越前守ヲメ尼箇崎ニ赴カシメ建部

二加リ此ノ地ヲ守ル
片桐ガ援兵多羅尾半左衛門尉ト云者妻
子ヲ彼津ニ置ク是ニ依テ諸卒ニ先立テ
尼箇崎ニ馳行キ建部ニ小船ヲ請テ是ニ
乘テ夜半ニ及ビ泉堺ニ至ル多羅尾半左
衛門ノ尉芝山此ノ地ヲ去ル事ヲ知ラズ今井
宗薫ガ家ニ入ル赤座内膳ノ正植島玄番頭
兵士ヲメ此家ヲ守ラシム警衛ノ兵多羅

尾ガ来ル事ヲ赤座植島ニ告テ謀テ是ヲ
擒ニセント欲ス多羅尾察メ今井ガ家ニ
放火シ奮戦テ自殺ス
片桐ガ軍士等尼箇崎ニ至テ渡海ノ船ヲ
請フ建部ガ從士等相議メ云ク片桐ハ秀
頼ノ長臣タリ関東ニ志ヲ通スルト云フ
トモ其心底覚束ナシト疑ヒ門戸ヲ閉テ
是ニ来會セズ片桐ガ兵士等進退途ヲ失

フ大坂ニ其聞エアルニ依テ大野修理亮
ガ従卒米村六兵衛ノ尉其子次太夫市之允
等ヲ尼崎ニ發メ中島ノ一揆北村三右
衛門尉ヲ招テ是ニ加ヘシト片桐ガ士卒
ヲ攻撃シト欲ス
秀頼片桐ヲ誅セント欲スルニ依テ片桐
大坂ヲ避テ茨木ノ古塁ニ入ルノ由其告
ゲアリ是ニ依テ　大神君大野壹岐守ヲ
メ片桐ヲ誅セント欲スル其意趣ヲ問ハ
シメンガ為メ大坂ニ赴カシメ給フ
三日　大神君引両ノ幕及ビ白旗ヲ宰相
義利ニ賜テ曰明日尾州ニ往テ兵ヲ發ス
ベキノ旨ヲ　命ゼラル
四日　台徳院殿群国ノ主ニ　命メ江戸
ノ城石壁ヲ築カシメ給フト云ヘドモ大
坂ノ兵乱其告ゲアルニ依テ此役ヲ止ラ

シ諸将国ニ帰テ軍用ヲ整ヱ兵ヲ大坂ニ発スベキ旨　台命ヲ奉テ各暇ヲ賜テ帰国ス

卅日片桐ガ兵士神崎ニ戦テ米村ヲ拒ント欲スルト云ヘドモ敵多勢ニメ其地利宜シカラズ伊丹ハ要害ノ地ナリ是ニ退テ戦ントス一揆ノ兵是ヲ追テ後ヨリ攻撃ツ日比ハ伊丹ノ郷民等片桐ガ下知ヲ仰グト云ヘドモ大坂ノ聞ヲ憚テ拒デ伊丹ノ郷ニ入レズ片桐ガ兵為方ナク茨木ノ城ニ軍ヲ返サント欲スルト云ヘドモ軍士皆倦労メ行歩進マズ一揆ノ多勢先途ヲ遮リ後ヲ襲テ攻撃ツノ間片桐ガ兵日比加左衛門尉牧野次太夫十川久兵衛ノ尉等所々ニ戦テ命ヲ殞ス

十日　奥平大膳太夫家昌（美作守信昌ガ嫡子）卒ス

三十八歳

十一月　大神君兵ヲ卒メ駿府ノ城ヲ出
給フ此日田中ニ着御
此日本多美濃守忠政勢州ノ軍勢ヲ卒メ
桑名ノ城ヲ發ス
十二月　大神君懸川ニ着御大野壹岐守
大坂ヨリ此ノ所ニ帰リ来テ云ク大坂ノ城
ニ入テ鈞命ヲ告ント欲スルト云ヘド
モ拒テ城ニ入レズ為方ナク帰リ去ルノ
旨ヲ達ス
十三日　大神君中泉ニ着御
十四日　大神君濵名ニ着御
十五日　大神君吉田ニ着御
此日　台德院殿秀頼御征伐トメ大坂御
發向ノ供奉ノ軍列ヲ定メ給フ

御旗（ハタブギヤウ）奉行

窪田治兵衛　三枝土佐守

御鑓（ヤリブギヤウ）奉行

小林勝之助　米津内蔵助　永田長左衛門尉

多門縫殿助　安藤次左衛門尉　小宮山又七郎

戸田七内　伊藤左馬允　小坂新助

松田三郎兵衛

御使番

小沢瀬兵衛　青山善四郎　岡部左衛門尉

山田十太夫　鈴木源三郎　安藤伝十郎

今村彦兵衛　牟礼（ムレ）郷右衛門尉　近藤助右衛門尉

石川又四郎　渡辺忠四郎　村瀬左馬助

中川忠右衛門尉　溝江外記　稲葉右京亮

菅沼源兵衛

諸道具（ニヤダメリ）奉行

秋山半左衛門尉　荒川又六郎　中山勘解由

神谷与七郎　山角文蔵　伊藤彦十郎

御目付

山崎太郎作　加藤伊織　永井源兵衛

高木九兵衛　木村源太郎

宿割（ヤドワリ）

浅井六之助　五味金十郎　芝山九兵衛

須田源兵衛　市川茂兵衛　青木小兵衛

高田小次郎　前川忠次郎

御幕（ミツ）奉行

朝比奈兵衛　内藤平兵衛

慶長十九年十月十五日

人数（ニンジユ）押（オシ）之次第

松平陸奥守

米沢中納言

佐竹右京大夫

一番

酒井雅楽頭　松平出羽守　松平土佐守
設楽(シタラ)三太郎　小笠原兵部　祢津小太郎
水谷伊勢守　仙石兵部大輔　仙石大和守
桐山大膳亮　六江兵庫助

二番

本多出雲守　本田伊豆守　脇田城介
蒲生兵部正　松下石見守　植村主膳正
土方河内守　蜂須賀阿波守

三番

榊原遠江守　松平丹後守　小笠原出羽守
成田左馬助　丹羽五郎左衛門

四番

本多甚助　佐久間備前守　佐久間大膳亮
服部宗左衛門　堀淡路守　筒井主殿頭
溝口伊豆守　高力左近　由良信濃守

五番

酒井雅楽頭
脇坂主水正
松平伯耆守
御旗本
本多佐渡守
立花飛騨守
岡部安房守
那須(ナス)衆

細川玄蕃頭
本多掃部頭
有馬玄蕃頭
本多大隅守
前田大和守
前田能登守
由利(ユリ)衆

牧野駿河守
新庄越前守
稲垣平右衛門尉
立花左近
日根野織部正
蒔田左兵衛尉
芦田(アシダ)衆

津金(ツガネ)衆　秋元越中守

慶長十九年十月十五日

蜂須賀(ハチスカ)阿波守至鎮先日江戸ニ在テ城ヲ築ク(キヅク)ノ時大坂ノ乱(ラン)ヲ聞テ阿州ニ檄(ゲキ)ヲ飛(トバ)メ老父(ラウフ)蓬庵(ホウアン)ニ是ヲ告ル蓬庵(ホウアン)聞テ兵ヲ卒(ソツ)メ南海(ナンカイ)ヲ廻(メグ)リ此日三州吉田ニ着岸(チヤクガン)ス本

多上野介正純ヲ以テ岡崎ニ参候メ
大神君ニ謁セント達ス　命有テ曰ク岡
崎ニ来テ吾ニ謁見スルニ及バズ直ニ江
戸ニ往テ　台徳院殿ニ謁スベキノ御
旨ヲ蒙ル是ニ依テ蓬菴江戸ニ赴ク
是月四日伊達正宗兵ヲ卒メ江戸ニ著ク
正宗小山ニ至ルノ日秀頼ノ使者和久半
左衛門尉是成（後ニ是安ニ改ム）ニ逢フ是成竊ニ

正宗ニ謂テ云ク片桐且元カ不義ニ依テ
大坂羣動ス故ニ　大神君台徳院殿是ヲ
怒リ給フ足下是ヲ和慰セヨ若シ然ラズ
ンバ志ヲ大坂ニ通ゼン事ヲ請フ正宗聞
テ飛使ヲ發メ　大神君台徳院殿両君ニ
是ヲ達ス和久ヲ生捕ルベキノ旨　命ゼ
ラル、ニ依テ遂ニ三島ノ驛ニメ謀テ是
ヲ擒ニス三島ノ代官井出藤左衛門尉佐

野平兵衛尉ニ人ニ和久ヲ預ケシメ給フ
大坂ヨリ御凱旋ノ後
和久ヲ平宗ニ賜ル
十七日大神君名護屋ニ着御雨ニ依テ
此所ニ一日御滞座
十九日大神君岐阜ニ着御
此日本多美濃守忠政勢州ノ兵ヲ率メ牧
方ニ陣ス
此日九鬼長門守守隆新家村ニ兵ヲ發メ

此所ヲ得テ陣ヲ張ル是ヨリ先キ守隆
台命ヲ奉テ大船五艘軍船五十餘艘ヲ催
ニ大坂ニ至テ川口ヲ拒テ諸国運送ノ商
船ノ往来ヲ留ル
同日驛路ノ制法ヲ定ラル

定

一路次中宿ヽ木賃之事宿主之薪を焼

においてハ一人ニ付悪銭三文宛たるへ
し但自分ニ薪を求焼においては右賃
も不可出之事

一駄賃馬之儀次之処より外ハ追通之
候しからさる事

一駄賃銭之事如前定厳重ニこれ渡す

右可相守此旨者也

慶長十九年
十月十九日

六日　大神君相原ニ着御

此日　台徳院殿御書ヲ藤堂高虎ニ賜

新ニ被入念早々被申越候由是ニ而承届候事候
書札之通令祝着候委細仕置之儀御
付候旨被申付前々申入候いかにも其意をう
頓而令出馬候間万事其元可申付候也

十月廿日

藤堂和泉守とのへ

廿一日　大神君永原ニ着御
卅日大坂ノ城ヨリ兵ヲ出メ郭外ヲ自焚ス
廿二日　大神君膳所ニ着御
廿三日　大神君御入洛
卅日　台徳院殿師ヲ帥テ江戸ヲ御進発
アリ卅日神奈川ニ着御此所ヨリ江戸ノ
城ヲ警衛スルノ諸将等ニ御書ヲ賜ル

今度留守中縫殿へ何様之儀有之とも城
中を出へからず候酒井河内守と相談せしめ
於城ハよく念を入諸事申付候て法度
以下堅固可申付也

十月廿三日

越前少将とのへ

今度留守ニ付而上意縫殿へ何様之儀
雖有之城中を出へからず諸法度以下

弟ニ相続せしめ候旨申付る也

十月廿三日

酒井備後守とのへ

内藤若狭守とのへ

三宅土佐守とのへ

朝倉筑前守とのへ

今度留守之儀申付上者万事遠慮
をかへりみず法度以下堅可申付候也

就最上宇都宮會津之人数等米津
勘兵衛嶋田兵四郎ニも在之旨ニ候依之
違背すへからさる条相続せしめ万端
念を入可申付事肝要也

十月廿三日

鳥居左京亮とのへ

今度留守之儀申付上者鳥居左京亮
米津勘兵衛嶋田兵四郎相談せしめ急

を入可申付事肝要(カンヨウ)也

十月廿三日

家康　駿河守とのへ

松平定行先列(センレツ)ノ　命ヲ奉(ウケ)テ　台旆(タイハイ)ニ先(サキ)立(ダツ)テ伏見ニ至ル父定勝ガ勢ヲ并テ伏見及ビ淀(ヨド)ノ古塁(フルトリデ)ヲ守ル其後定行陣ヲ住吉(スミヨシ)ニ張ル

廿四日　大神君ノ御営中(ゴエイチウ)ニ　勅使(チヤクシ)来ル

廣橋(ヒロハシ)　三条　両

此日　台徳院殿藤澤(フヂサハ)ニ着御(チヤクギヨ)蜂須賀(ハチスカ)蓬庵(ホウアン)此驛(エキ)ニ至テ　台徳院殿ニ謁(エツ)ス　命ヲ奉(ウケ)テ江戸ニ赴(オモム)ク

廿五日　台徳院殿小田原ニ着御

此日　大神君御書ヲ蓬庵(ホウアン)ニ賜ル

今度此表(オモテ)阿波守事入精(セイ)候段満足候

之内出き作兵衛か井大悦申しけれ也

十月廿七日

蓬菴

廿六日 台徳院殿三島ニ着御

卅日 藤堂高虎矢ヲ河州ニ発メ国府ニ陣ス

大神君命メ高虎ヲ先隊ニ定ラレ和州ノ軍勢ヲ加ヘラレメ給フ

廿七日 台徳院殿道ヲ倍メ清水ニ着御

卅日 和州ノ軍勢国府ニ来テ高虎ガ陣ニ加ル

高虎矢ヲ発メ小山近邊ニ放火シ国府ニ帰ル

廿八日 台徳院殿懸川ニ着御

卅日 高虎ニ御書ヲ賜ル

書状ハ略ス

書状今日懸川ニ而令披見候路次中飛立

程ニ思召候大軍召連候而在之由さし候で

之内玄を作妾細去并大總帥ニ下りし也

十月廿七日
蓬菴

廿六日　台徳院殿三島ニ着御

卅日　藤堂高虎矢ヲ河州ニ發メ國府ニ陣ス大神君命メ高虎ヲ先隊ニ定ラレ和州ノ軍勢ヲ加ヘニメ給フ

廿七日　台徳院殿道ヲ倍メ清水ニ着御

卅日　和州ノ軍勢國府ニ来テ高虎ガ陣ニ加ル高虎矢ヲ發メ小山近邊ニ放火シ國府ニ帰ル

廿八日　台徳院殿懸川ニ着御

卅日　高虎ニ御書

書状今日懸川ニ至く披見候路次中飛達程ニ思召候大軍召連候ハ成るましく候で

今度明判ハ餘遅リ候て居ル人数限ニ下
付除分成候得共色て事し大勝未二月
三月比よ石上見し候得ニ上見し返
す大坂沙汰遅てす沙汰社成ならし
机ニ上候無度之事し候是非共
共方を頼しや

十月廿八日

萬屋和泉やとのへ

同月高虎越前大和二國ノ矢卜共ニ進テ
小山ニ陣ス
六九日　台徳院殿吉田ニ著御
卅日高虎泉堺ヲ左ニシ住吉ヲ右ニメ野
ニ陣ヲ張ル

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan